

令和8年度 第1回 学校運営協議会 議事録

日 時 令和8年5月14日(木) 午後2時から3時30分まで
会 場 ふじのくに国際高等学校 情報コミュニケーション演習室
出席者 委員4名中3名出席

1 校長あいさつ

本年度、入学年次から卒業年次まで全ての学年が揃った。生徒の成長も、より見られるようになった。入学年次の生徒も卒業年次の先輩が築いてきたことを学び、そこに向けて努力している姿が見られ、これまで学校としてやってきたいことが生徒に浸透してきていると感じている。それぞれの思いのマッチングを大切にしながら、気持ちを一つにして成長していけたらと思う。これをバックアップしてもらっているのが、学校運営協議会や地域の方であり、生徒の成長につながっている。今後もこのような取組をより充実させていきたい。

2 学校運営協議会・ふじのくに国際高校の様子について

石田教頭より説明。学校運営の在り方は大きく変化しており、学校評議員会から学校運営協議会へと発展し、地域との関係が学校の外側から内側へと大きく変化した。学校運営協議会の委員の方々にも「ふじ国」のビジョンや考えを共有し、昨年度同様に、協力して活動していきたい。

学校生活の様子では、私服で登校などの一定の自由度がある一方、挨拶を交わす場面なども見られ全体的には落ち着いている感じがある。現在、入学年次は落ち着いて生活ができており、中間年次は「マイプロ」に向けて頑張っている。卒業年次は個々の進路実現に向けて自ら計画し進んでいる姿がみられる。4月に行われた対面式では、年次が混ざったグループによるレクリエーションなども実施され、学年を超えた友人関係を育む姿が見られた。また、SC、SSWrを配置し、不登校傾向の生徒への継続的な支援を行っている。I部の生徒が50%、II部の生徒が40%、III部の生徒が10%を占めている。入学試験では、前年度と比べ大きな倍率の変動はなかった。

3 授業参観・校内散策

IBコースの美術を参観した。

4 学校経営計画の概要説明

校長より令和8年度学校経営計画について説明。(以下概要)

スクールポリシーに記載されている学校像を目標とし、今後も学校づくりに取り組んでいく。探究的な学びを核に、一人ひとりの学びを支援し、個の殻に閉じこもることなく、

周囲と関わりながら自分を見つめ、自分の考えや感じたものを大切にしながら学びを探究していく。また、前年度のアンケート結果などを基に学校経営計画書に示された各項目の数値等を一部変更させた。さらに、国際バカロレア開始に伴い1項目を追加した。今年度の様子についてもアンケートを実施し、経年的に調査していく。

5 グループ協議

(1) 地域連携（出席者：委員 A、本校職員 8 人）

「各年次の探究の活動状況」

職員 B：卒業年次は今年度の探究活動（以下、CB と表記）で、マイプロジェクトの最終発表と、その後のマイクロスボードストーリーにチャレンジすることになっている。

職員 C：中間年次はマイプロジェクトを進める中で、前期は社会課題・地域課題を知り、自分がどのように関わられるかを考え、課題を自分事に落とし込むことを目標にしている。後期はマイテーマを決め、アクションと振り返りを行うことになっている。

職員 B：入学年次は探究の基礎を学び、地域の魅力発信プロジェクトを実施することになっている。

「地域連携と進路のつながり」

教 頭：今年度は CB を 3 年間学習してきた生徒たちが初めて卒業を迎える。これまで CB で学んできたことを今後に生かしてほしい。

職員 A：CB で自分自身が学んできたことや興味関心のあることを、さらに深掘りした学びを上級学校で展開してほしい。

職員 B：昨年度宮崎県の学校を視察に行った際にも、高校での探究学習と上級学校での学習を結びつけるプロセスの構築には時間がかかるという話になった。本校でのプロセス構築も徐々に行っていきたい。

教 頭：その学校では、上級学校卒業後、地元に戻って就職する U ターンの流れができ始めていると聞いた。本校でも、U ターン就職して地元の発展に貢献したいと考える生徒が出てくるように、一連の取組を構築できるとよい。

委員 A：島田・藤枝地区の小・中学校、高校に地元企業の社員が訪問して、仕事をしている魅力的な姿を高校生に見せるという取組を行っていて、今年度も継続して実施している。本校でも同様の取組を実施し、地元企業とのつながりを深めていきたい。

職員 B：中間年次の CB 内で、地元企業の方を招いて行った「相談会」は、生徒にとって貴重な経験になった。参加した生徒は、自分自身のことについて格段に話せるようになっていた。効果が実感できていることもあり、今後も継続していききたい取組である。

委員 A：効果があるのなら、就職希望者の面接練習を企業の方をお願いしてはどうか。

職員 A：8月には面接練習の予定があるため、島田市商工会に依頼をしてみようと思う。

「地域から見た本校生徒の印象、期待される役割や要望」

委員 A：他校の生徒よりもプレゼンテーションが上手。流暢に英語を話せる生徒がいる。伸びしろがある学校だと感じている。だからこそ、地元の人と関わってほしい。「相談会」は高校生にとって貴重なだけでなく、企業の方にとっても勉強になる機会だと伺っている。中には、本校生徒に求人票を出して一緒に働きたい、自身の企業に推薦したいなどと話す方もいる。

職員 D：探究学習を行い、地元の方と関わることで、自分に自信をもって発表できるようになる。それが、自信を持った生活につながっていくのだと感じている。

委員 A：地元の方の中には、国際バカロレアって何だろうと思っている人が多くいる。情報発信が必要であると感じている。地域の祭りなどに参加し、学校をアピールしてはどうか。

職員 E：生徒が地域に出ていくことは生徒会としても推進していきたいところ。ブースなどをいただけたら、そこで学校の説明を行いたい。

委員 A：ボランティアなどにも積極的に参加し、地域と関わるといい。

(2) 広報活動（出席者：委員 B、C、本校職員 6人）

副校長：学校の知名度がまだ低いように感じているため、それを高めたい。本校のスクールポリシーを正しく伝え、様々なことに高い意欲をもって取り組める生徒を募集したい。また、国際バカロレア教育（以下、IB と表記）の知名度も上げたい。まずは IB にチャレンジする精神を持ってほしい。そこから体験授業の受講につなげたい。中学生が志望校を決定する際、他の普通科高校との比較対象として、IB 校である本校を選択肢に加えてもらいたい。

副校長：今後は6月1日、2日の放課後に IB 説明会を実施する予定である。また、今年度は11月に体験授業、1月に中学2年生を対象とした説明会を実施する予定である。中学3年生は夏には志望校が決まっている傾向にあるので、1月には2年生を対象に説明会を行うのが望ましいと考えてのことである。

委員 B：IB というコンテンツ自体を宣伝するのは大掛かりで難しい。現状は、中学生が自力で調査しないと IB の詳細情報にたどり着けないと感じている。

委員 C：IB を手法として捉え、IB を受講することのメリットを宣伝してはどうか。学力だけでなく思考力やコミュニケーション力など学習者としての基礎基本が身につく、海外大学への受験の近道になる、など。もっと教員が強気に IB の強みを推しているのではないか。

副校長：高校を卒業した後の幅広い選択肢を、他校との差別化して謳うことで、意欲ある生徒に印象づけるようにしたい。

委員 B：先日話したところ、島田市教育長も IB、ひいてはふじのくに国際高等学校の取組に興味を持っている様子であった。島田市と連携をするもありではないか。小学校・中学校から IB 教育を肌で感じられるような体験授業を行うなどの取組ができると望ましい。理想は、島田市を IB の町として売り出していけるようになること。小学校、中学校で IB 連携のモデル校を作ってしまうのはどうか。

委員 C：この学校に来るとどうなるのか。卒業後のゴールを見据えたいと感じている中学生や保護者は多いはず。卒業生の声や卒業後の活躍を、SNS などを利用して発信するとよい。生徒の内面や人柄が見えるように、できればショートムービーが望ましい。

委員 C：外部の団体が、独断で本校の情報を流していることがある。その情報にはプラス面だけでなく、マイナス面が書かれていることもある。また、Google のレビューなども意外と見られている。自校からの発信だけでなく、外部の発信や書き込みにも注意した方がよい。

職員 F：note などを活用して IB の取組を可視化できるようにするのはどうか。SNS の運用が増えてしまうが、どのように考えるか。

委員 C：教員の手間が増えるのは大丈夫か。運用 SNS を増やせば、その分インターネットトラブルの危険性も増えることは念頭に置いた方がよい。現在運用している SNS を、在校生が発信するのはどうか。常時生徒が運用するのではなくとも、行事だけでも生徒視点の発信があれば広報になるのでは。

委員 B：大人が思いもしなかったところが、子どもの心に刺さることがある。エレベーター前のぼつんと置かれた机など、こんなところでも勉強できるんだ、と意外性を感じてもらえると思う。子どもならではの視点を発信するのは効果的かもしれない。最近では静止画よりも動画の方が子どもは閲覧するようだ。TikTok などのショート動画の方が、雰囲気伝わりやすいのではないか。